### 4.3. 本番（1999 年 2 月 1-19 日）

２月１日（月）そのオープニングの日がやって来た。朝、作品展示を確認してから、会議場や国連各機関の常設展示場等へ案内。昼食は国連内レストラン。午後は夕刻のオープニングに備えての精神集中と口上準備。日英独と三つの言葉で作ったちらしも、職場誌エコーに投稿したカリグラフィー解説記事のコピーも会場での配布用に用意した。五時すぎから三々五々と集まってくる。職場や同好会の友人、語学教室の仲間、協力してくれたアートクラブのメンバーたち。日本人の仲間ももちろん居る。予め準備してもらった飲み物を手にして会場内を歩き回っている。麗泉が持参の小振りの樽酒も出されている。会場内を歩きながら作品を説明などして談笑する。日頃の展示にない「字」が珍しいからだろう、色んな質問が出る。黒の正装姿の麗泉もちゃんとした英語で堂々と談笑する。静かにカメラをまわす旦那の得意そうな姿の横で、私は感嘆と眩しさを感じていた。

頃合いを見て開会の口上を述べる[1]。最初に来場お礼の挨拶、自分自身と他の出品者の紹介をしてから、「書の ABC」と題して簡単な歴史、用具、手法を説明。また、「一」「二」「日」「水」などの簡単な字を例にして漢字が表意文字であることを説明する。地元の人気アーティストであるフンデルトヴァッサー（邦名「百水」）の名も引用して解説する。これは私の役目である。思ったほど緊張しなかった。観客はワイングラスを手に興味深そうに耳を傾けている。

次いで、観客を巻き込んでの「入門クラス」。「誰か書いて見ますか」と誘うと二人が名乗り出た。最初はハイキング仲間のオランダ人男性、次はスピーチクラブで知り合いの地元オーストリアの女性。条福サイズの紙に比較的まともに書いて喝采を浴びていた[2]。二人は自分の作品を大事に持ち帰った。

いよいよ「実演の核心」、麗泉の登場である。色紙数枚を皮切りに、濃淡、大小の字を白紙に書き進む姿に観客は息を呑んで見詰めている。さすがの麗泉も緊張気味か、最初は手先が小刻みに震えている。が、字を書くためのビブラートかなとも思った。小学校高学年くらいの女の子が食い入るようにかぶり付きで見入っている。上背のある人は他の客の後方から身を乗り出すように見詰めている。私はその様子を外側から眺めていた。

緊張がほぐれたか、麗泉の手は落ち着いてきた。国連代表部の田大使も折からの理事会を議長として取り仕切ったあと立ち寄ってくれた。色紙の次

[1] 本来なら、開会の口上は先輩格の白山氏にお願いするところだが、自分は出品者ではないしというし、玉谿（通子）さんはしり込みするし、で私の役割になった。私も目立ちたがり屋でもあるし、と思った。
[2] 手前味噌だが、この観客参加の試みが好評だった。こちらの人は「参加」に物怖じせず積極的である。「展示は静かに見るもの、実演は馴染まない」と玉谿は消極的だったが、決行して良かったと確信した。

は、紙や墨の特徴を生かして「滲み」を効果的に使って全紙大の紙に、創作の「雪月花」。持参の大きな筆から濃淡の墨が踊るように白い紙の上を走る。前年暮れに公務で訪ねたチュニスで買い求めた陶器の皿が硯代わり。観客はじっと見つめていた。書き終わったあとの観客のささやき声は字の意味でも察しているのだろうか。その観客の感嘆と賞賛の雰囲気を満足感で見つめる私に後方から、「あの作品を譲ってもらえないだろうか」と小声で聞いてきた女性がいた。どうしても欲しい、と言う。麗泉に確認したあと「どうぞ」と伝えると、満面の笑みで感激していた。途端に、他の観客から「貰えるのか、なら私も欲しかった」とため息が流れた。

最後は、要望に応えての「揮毫」。客の希望を聞いて色紙にその字を書いてあげる、との趣向である。前年秋の入院生活中に思いついた構想である。希望は英語で来る。それを翻訳して漢字にして書く。貰う人は漢字にエキゾティックな感じを持つのだろう、前段の「雪月花」が伏線になって希望者が殺到した。麗泉はそのために無地の色紙を用意してくれていた。が、足りない程だった。会場では時間が足りず、後日麗泉と私で手分けして書いて希望者に届けた。贈った文字を以下に示す。

| 所望者 | 要望文字 | 揮毫文字 |
|---|---|---|
| Hedwig Ziegler | Love | 愛 |
| Ursula Ucicky | Good luck | 幸運 |
| Christine Mueller | Peace | 平和 |
| Marianne Thatcher | Love | 愛 |
| Amila Winalaratne | Priceless | 無限の価値 |
| Beatrix Blechner | Bluehdorn (blooming thorn) | 華茨 |
| Marie-Andree Zahradnik | Himmel (Sky, Ciel) | 天 |
| Anne-Sophie Albert | Anne-Sophie (Wisdom) | 智 |
| Marie-Laurence Albert | Marie-Laurence | 麻里楼蘭ｽ |
| Victor Arkhipov | I love you. Victor (Message to wife) | 愛する妻へ. Victor |

オープニングは予定の一時間を遥かに超えた。予想を越える観衆と二時間あまりの実演に成功だと確信した。うまく行った。多くの観客もワイン、日本酒を手に楽しんでくれた。希望の言葉の色紙を手にした人は嬉しそうにお礼を言ってくれた。少しでも永く、居室や居間に飾って欲しいと思った。私だけでもその部屋を訪ねる機会があれば、とも思った。

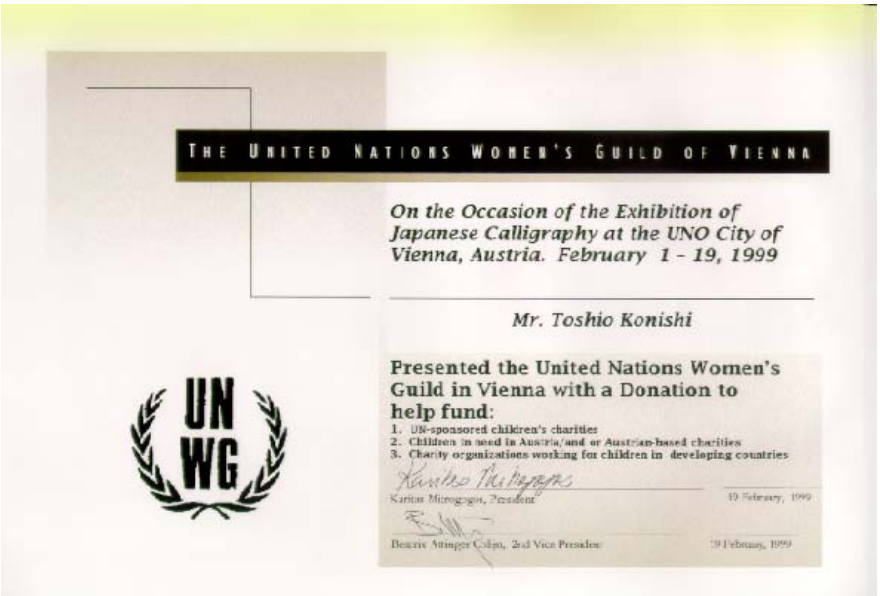
達成感があった。充実感があった。こんな機会は二度とあるまい、とも思った。芸術とは無関係だと思っていた自分に、こんな思い出ができるとは、と感に入っていた。協力してくれた麗泉に感謝した。実演の後半から外では小雪がちらついていた。道具を片づけて夕食はチターのメロディーが流れるレストランで麗泉夫妻と摂った。外では頻りに雪が降っていた。帰路についた夜十時過ぎには路面も屋根も一面雪で

被われていた。白と黒の夜の景色が、書作品に重なって見えた。

オープニング後の最初の金曜には帰国の麗泉夫妻を空港に見送った。展示会はその後二週間続いた。展示会場に初日のオープニングほどの観客が常時有る訳はない。が、仕事の合間に会場を時折訪れてみて、静かに作品を見ていてくれている人を目にすると嬉しかった。声をかけて説明したい誘惑を感じた。正直言って、「絵」より「書」の前に立っていてくれると嬉しかった。

展示会では「作品を購入したい」と言う人が現れる場合がある。その話をアートクラブから聞いていた。「まさか自分の作品を求める人は居まい」と麗泉も自分も思ったが、「万一」も考えて事前に対応を相談していた。「有り得まいけれど、もしあるなら寄付」と麗泉は言っていた。「出品者は表装実費、購入者はその半額」を目安に価格を付けることにした。その「万一」があった。漢字への憧れなのか、「書」へ共感したのか、購入打診が数件有った。私の作品「露」の希望もあった。売上金は麗泉の発案で、国連主導の児童福祉寄金に全額寄付した。通常は売り上げの２０％を手数料としてアートクラブが徴収するのだが、「寄付するなら」と免除してくれた。展示終了後に寄付手続きをし、礼状を受け取った。

思い付きに近い「書展」だったが、個人レベルでの文化交流になったと同時に、国連活動にも貢献できた。展示会最終日、購入希望の作品を買い手に渡す。翌土曜日、作品を撤去し日本へ送り返すための麗泉作品を自宅で梱包。日曜には運送屋が彼女の作品を持ち去った。大袈裟だが「一生に一度」がこれで終わった、と思いつつトラックを見送った。自分の作品は、譲ってもらった麗泉の作品と合わせて自宅と事務所に分けて架けてある。


THE UNITED NATIONS WOMEN'S GUILD OF VIENNA

*On the Occasion of the Exhibition of Japanese Calligraphy at the UNO City of Vienna, Austria. February 1 - 19, 1999*

*Mr. Toshio Konishi*

UN WG

**Presented the United Nations Women's Guild in Vienna with a Donation to help fund:**

1. UN-sponsored children's charities
2. Children in need in Austria/and or Austrian-based charities
3. Charity organizations working for children in developing countries

Karitas Mitogogos, President — 19 February, 1999

Beatrix Stinger Colyn, 2nd Vice President — 19 February, 1999